



Red Hat

Red Hat OpenShift Cluster Observability Operator 1-latest

Red Hat OpenShift Cluster Observability Operator リリースノート

この OpenShift Cluster Observability Operator リリースの新機能と変更点のハイライト

Red Hat OpenShift Cluster Observability Operator 1-latest Red Hat OpenShift Cluster Observability Operator リリースノート

この OpenShift Cluster Observability Operator リリースの新機能と変更点のハイライト

Legal Notice

Copyright © 2025 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution-Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux® is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java® is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS® is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL® is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js® is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack® Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

Abstract

以下の OpenShift Cluster Observability Operator リリースノートでは、新機能および拡張機能のすべて、以前のバージョンからの主な技術上の変更点、主な修正、および一般公開バージョンの既知の問題をまとめています。

Table of Contents

第1章 CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR リリースノート	3
1.1. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.3	3
1.2. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.2.2	6
1.3. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.2.1	7
1.4. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.2	7
1.5. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.1.1	8
1.6. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.1	8
1.7. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.0	9
1.8. 以前のテクノロジープレビューで利用可能な機能	10
1.9. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.4.1	11
1.10. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.4.0	11
1.11. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.3.2	12
1.12. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.3.0	12
1.13. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.2.0	13
1.14. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.1.3	13
1.15. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.1.2	13
1.16. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.1.1	14
1.17. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.1	14

第1章 CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR リリースノート

Cluster Observability Operator (COO) は、オプションの OpenShift Container Platform Operator です。管理者はこれを使用して、さまざまなサービスやユーザーが使用できるように個別に設定できる、スタンドアロンのモニタリングスタックを作成できます。

COO は、OpenShift Container Platform のビルトインモニタリング機能を補完します。これは、Cluster Monitoring Operator (CMO) で管理されるデフォルトのプラットフォームおよびユーザーウェブモニタリングスタックと並行してデプロイできます。

これらのリリースノートは、OpenShift Container Platform での Cluster Observability Operator の開発を追跡します。

次の表に、Cluster Observability Operator と OpenShift Container Platform のバージョンに応じて利用可能な機能に関する情報を示します。

COO のバージョン	OCP のバージョン	分散トレーシング	ロギング	トラブルシューティングパネル	ACM アラート	インシデント検出
1.1 以降	4.12 - 4.14	✓	✓	✗	✗	✗
1.1 以降	4.15	✓	✓	✗	✓	✗
1.1 以降	4.16 - 4.18	✓	✓	✗	✓	✗
1.2 以降	4.19 以降	✓	✓	✓	✓	✓



重要

OpenShift Container Platform 4.19 以降、Web コンソールのパースペクティブが統合されました。Developer パースペクティブは、デフォルトでは有効になっていません。

すべてのユーザーは、OpenShift Container Platform Web コンソールのすべての機能を操作できます。ただし、クラスター所有者ではない場合は、特定の機能に対する権限をクラスター所有者に要求する必要がある場合があります。

引き続き Developer パースペクティブを有効にできます。Web コンソールの **Getting Started** ペインでは、コンソールツアーの実行、クラスター設定に関する情報の検索、Developer パースペクティブを有効にするためのクイックスタートの表示、リンク先を表示して新機能の確認などを行えます。

1.1. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.3

Cluster Observability Operator 1.3 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHSA-2025:21146 Cluster Observability Operator 1.3](#)

1.1.1. 新機能および機能拡張

インシデント検出機能が一般提供になりました

Cluster Observability Operator のインシデント検出機能が、OpenShift Container Platform バージョン

ン 4.19 以降のリリースで一般提供 (GA) ステータスになりました。インシデント検出機能は、関連するアラートをインシデントにグループ化することで、オブザーバビリティーを簡素化します。これにより、アラート疲れが軽減され、問題の根本原因に集中できるようになります。一般提供 (GA) ステータスへの移行に伴い、インシデント検出機能は、実稼働環境に対応し、エンタープライズプロダクトで完全にサポートされるようになりました。ユーザーは、モニタリング UIPlugin のリソースを通じて、`spec.monitoring.incidents.enabled: true` を設定することによりインシデント検出を有効にできます。

詳細は、[インシデント検出](#) を参照してください。

[COO-1281](#)

インシデントビューがサイレント化されたアラートをサポートするようになりました

このリリースでは、モニタリング UI プラグインのインシデントビューで、サイレント化されたアラートがサポートされています。サイレント化されたアラートは、インシデント検出 UI では **Silenced** という **state** とともに表示され、タイムラインでは明るい色で表示されます。これにより、アクティブなアラートと区別し、クラスターのオブザーバビリティーシグナルの完全な状態を把握できるようになります。

[COO-1280](#)

トラブルシューティング機能が一般提供になりました

Cluster Observability Operator のトラブルシューティング機能は、本リリースでは、OpenShift Container Platform バージョン 4.19 以降、一般公開(GA)ステータスに到達し、以前のバージョンではサポートされていません。トラブルシューティング UI プラグインは、オープンソースの Korrel8r プロジェクトが提供するオブザーバビリティーシグナル相関付け機能を提供します。トラブルシューティングパネルを使用すると、さまざまなデータストア全体のメトリクス、ログ、アラート、ネットフロー、その他のオブザーバビリティーシグナルおよびリソースを簡単に相関付けることができます。

詳細は、[トラブルシューティング UI プラグイン](#) を参照してください。

ObservabilityInstaller カスタムリソースによるエンドツーエンドオブザーバビリティー

Cluster Observability Operator は、最小限の設定でエンドツーエンドのオブザーバビリティーをデプロイするための **ObservabilityInstaller** カスタムリソースを、テクノロジープレビュー機能として提供します。ObservabilityInstaller カスタムリソースは、Operator のインストール、ストレージ設定、UI 統合を自動的に管理することで、ロギング、トレーシング、OpenTelemetry 機能のデプロイを簡素化します。

1.1.2. バグ修正

トラブルシューティングパネルが OpenShift Container Platform 4.19 のアラート URL を正しく処理するようになりました

この更新の前に、OpenShift Container Platform 4.19 でアラート URL の形式が変更されました。これにより、一部の URL にアラート名が含まれなくなり、コンソール内部用の数値 ID のみが含まれるようになりました。その結果、korrel8r トラブルシューティングパネルがこれらの URL を正しく処理できず、アラートを関連リソースと関連付けることができなくなりました。

このリリースでは、korrel8r は数値 ID のみを含む URL を含め、OpenShift Container Platform 4.19 からのアラート URL を正しく処理します。その結果、トラブルシューティングパネルは、OpenShift Container Platform 4.19 クラスター上のすべてのアラートタイプに対応して正常に機能するようになりました。

[COO-1145](#)

モニタリング UIPlugin の設定が Operator のアップグレード後も維持されます

この更新前は、Cluster Observability Operator をバージョン 1.2.0 から 1.2.1 以降にアップグレードすると、アップグレードプロセス中にモニタリング **UIPlugin** の設定が削除されていました。**UIPlugin** の spec が空になり、プラグインタイプのみが表示され、RHACM 統合設定、Perseus ダッシュボード、インシデント管理設定などの設定の詳細がすべて失われていました。その結果、アップグレード後にユーザーがモニタリングダッシュボードやモニタリング機能にアクセスできなくなりました。また、Operator が **monitoring configuration can not be empty for plugin type Monitoring** というエラーをログに記録していました。

このリリースでは、Cluster Observability Operator はアップグレード時にモニタリング **UIPlugin** の設定を正しく保持します。そのため、Operator のアップグレード後も、モニタリングダッシュボード、RHACM 統合、およびインシデント管理機能を、手動で再設定することなく引き続き利用できます。

[COO-1051](#)

UIPlugin のステータスがすべてのリコンシリエーションシナリオで正しく更新されます

この更新前は、**UIPlugin** のコントローラーが、すべてのリコンシリエーションシナリオで、カスタムリソースのステータスフィールドを更新していました。コントローラーはリコンシリエーションエラーの発生時にステータスの更新に失敗していました。そのため、設定の変更が適用されていない場合でも、ステータスが成功と報告されていました。その結果、ユーザーはステータスフィールドを通じて **UIPlugin** リソースの状態を正確に確認することができず、問題をデバッグするために世代フィールドや Operator ログを確認する必要がありました。

このリリースでは、Cluster Observability Operator は、エラー発生時を含むすべてのリコンシリエーションシナリオで、**UIPlugin** のステータスを正しく更新します。そのため、ユーザーは **UIPlugin** のステータスフィールドがリソースの現在の状態を正確に反映していると信頼できるようになり、設定の問題をより効果的にトラブルシューティングできます。

[COO-1055](#)

分散トレーシング UIPlugin が TraceQL クエリーの二重引用符を処理するようになりました

この更新前は、COO 1.2.2 の分散トレーシング **UIPlugin** が、TraceQL クエリー式の二重引用符を適切に処理していませんでした。属性値に二重引用符が含まれている場合 (HTTP ルート属性の正規表現パターンなど)、クエリーパーサーが失敗していました。そのため、ユーザーはユーザーインターフェイスのドロップダウンメニューからこのような値を選択しても、二重引用符を含む属性を持つトレースを照会できませんでした。

このリリースでは、Red Hat OpenShift Cluster Observability Operator 分散トレーシングコンソールプラグインは、属性値に二重引用符が含まれている TraceQL クエリーを正しく処理します。その結果、ユーザーは、二重引用符などの特殊文字が含まれている属性値を含め、任意の属性値を使用してトレースを照会できるようになりました。

[COO-1175](#)

トラブルシューティングパネルがデプロイされている場合にのみ、ロギングビュープラグインが korrel8r に通信を転送します

この更新前は、トラブルシューティングパネル **UIPlugin** がデプロイされていない場合でも、COO 1.2.1 のロギングビュープラグインにより、korrel8r サービスにトラフィックを転送するように Red Hat OpenShift Cluster Observability Operator コンソールが設定していました。コンソールは存在しないサービスに接続しようとしていたため、アクセス拒否エラーが発生していました。その結果、ログビューで "Missing permissions to get logs" というエラーメッセージが表示されました。このエラーは、ユーザーの介入なしに 30 - 60 秒後に自動的に解決されました。

このリリースでは、トラブルシューティングパネル **UIPlugin** がデプロイされている場合にのみ、Cluster Observability Operator はロギングビュープラグインで korrel8r のプロキシーを設定します。その結果、トラブルシューティングパネルを使用せずにログを表示するときに、誤った権限エラーが発生しなくなりました。

COO-1253

分散トレーシングの検索フィールドがキーボードナビゲーションをサポートするようになりました

この更新前は、分散トレーシングコンソールプラグインの検索フィールドが、キーボードのみのナビゲーションをサポートしていました。ユーザーがフィルター値を入力し、**Enter** キーを押して選択しても、フィルターが適用されずにページがテナント選択画面にリセットされていました。その結果、キーボードのみを使用するユーザーは、サービス名やその他の属性でトレースをフィルタリングすることができず、マウスを使用して選択する必要がありました。

このリリースでは、Red Hat OpenShift Cluster Observability Operator 分散トレーシングコンソールプラグインが、検索フィールドの **Enter** キーを正しく処理するようになりました。その結果、ユーザーはキーボードのみのナビゲーションを使用してトレースフィルターを適用できるようになりました、アクセシビリティが向上しました。

COO-1017

UIPlugin 設定を変更すると無効な機能の Pod が削除されます

この更新前は、COO 1.2.1 の **UIPlugin** コントローラーは、ユーザーが設定を更新したときに無効な機能の Pod を削除しませんでした。ユーザーが **UIPlugin** 仕様で **perses.enabled: false** または **incidents.enabled: false** を設定しても、関連付けられている Pod (perses-0 および health-analyzer) が引き続き実行されていました。その結果、ユーザーは Perses ダッシュボードやインシデント機能を無効にできず、無効にしたはずのコンポーネントがクラスターリソースを消費し続けていました。

このリリースでは、Cluster Observability Operator は、**UIPlugin** 設定で機能が無効になっている場合に Pod を正しく削除します。そのため、ユーザーは **UIPlugin** 仕様を更新することで、Perses およびインシデント機能を有効または無効にでき、それに応じて関連する Pod が作成または削除されます。

COO-1054

1.1.3. CVE

- [CVE-2025-2843](#)
- [CVE-2025-7783](#)

1.2. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.2.2

Cluster Observability Operator 1.2.2 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHBA-2025:11689 Cluster Observability Operator 1.2.2](#)

1.2.1. バグ修正

- この更新前は、インシデント検出機能のインストールが時折失敗するようになりました。現象としては、インシデント検出の UI は表示されるものの、データが含まれていないことがあります。さらに、health-analyzer **ServiceMonitor** リソースが失敗状態になり、**tls: failed to verify certificate: x509** というエラーメッセージが表示されます。このリリースでは、インシデント検出機能が正しくインストールされます。[\(COO-1062\)](#)
バグが発生していた 1.2.1 からアップグレードする場合は、問題を解決するためにモニタリング UI プラグインを再作成する必要があります。

1.2.2. 既知の問題

Cluster Observability Operator 1.2.2 の既知の問題は次のとおりです。

- バージョン 1.2.2 をインストールする場合、またはバージョン 1.2.0 からアップグレードする場合、モニタリングプラグインの **UIPlugin** リソースが破損する可能性があります。これは、モニタリング UI プラグインとともに、分散トレーシング、トラブルシューティングパネル、Advance Cluster Management (ACM) をデプロイした場合に発生します。この問題は UI プラグインを再作成することで解決できます。([COO-1051](#))
以前に 1.2.1 で問題を解決し、その後 1.2.2 にアップグレードした場合、この問題は再発しません。

1.3. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.2.1

Cluster Observability Operator 1.2.1 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHBA-2025:10696 Cluster Observability Operator 1.2.1](#)

1.3.1. バグ修正

- この更新前は、Operator バージョン 1.2 へのアップグレード中に古いバージョンのラベルマッチャーが保持されていました。このため、Perses ダッシュボードが利用できなくなりました。このリリースでは、バージョンラベルが削除され、Perses ダッシュボードが正しく調整されるようになりました。

1.3.2. 既知の問題

Cluster Observability Operator 1.2.1 の既知の問題は次のとおりです。

- インシデント検出機能のインストールが時折失敗することがあります。現象としては、インシデント検出の UI は表示されるものの、データが含まれていないことがあります。さらに、**health-analyzer ServiceMonitor** リソースが失敗状態になり、**tls: failed to verify certificate: x509** というエラーメッセージが表示されます。この問題は、1.2.2 にアップグレードし、モニタリング UI プラグインを再作成することで解決できます。([COO-1062](#))
- バージョン 1.2.1 をインストールする場合、またはバージョン 1.2.0 からアップグレードする場合、モニタリングプラグインの **UIPlugin** リソースが破損する可能性があります。これは、モニタリング UI プラグインとともに、分散トレーシング、トラブルシューティングパネル、Advance Cluster Management (ACM) をデプロイした場合に発生します。この問題は UI プラグインを再作成することで解決できます。([COO-1051](#))

1.4. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.2

Cluster Observability Operator 1.2 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHBA-2025:8940 Cluster Observability Operator 1.2](#)

1.4.1. 新機能および機能拡張

- ログイン UI プラグインが、以前サポートされていた ViaQ スキームに加えて、OTEL 形式もサポートするようになりました。([COO-816](#))
- モニタリング UI プラグインをインストールすると、Accelerator Perses ダッシュボードがデフォルトでデプロイされます。([COO-942](#))

- Korrel8r で、グラフノードごとに複数の結果が表示されるようになりました。(COO-785)
- インシデント検出パネルで、各インシデントの詳細への直接ナビゲーションがサポートされるようになりました。これにより、Red Hat Advanced Cluster Management (RHACM) 2.14 のインシデント概要機能が有効になりました。(COO-977, ACM-18751)
- トレースビューに高度なフィルターが追加されました。(COO-979)
- 分散トレーシング UI プラグインが一般提供 (GA) ステータスになり、Patternfly 4、5、6 をサポートするようになりました。(COO-873)

1.4.2. バグ修正

- 以前は、ロギング UI プラグインをインストールするための前提条件として LokiStack が必要でした。このリリースでは、LokiStack なしでロギング UI プラグインをインストールできます。(COO-760)
- 以前は、**Incidents** → **Component** セクションの **Silence Alert** ボタンでフィールドが事前に入力されず、ボタンを使用できませんでした。このリリースでこの問題が解決されました。(COO-970)

1.4.3. 既知の問題

Cluster Observability Operator 1.2.0 の既知の問題は次のとおりです。

- COO 1.1.1 から COO 1.2 にアップグレードする場合、Perses ダッシュボードが正しく調整されないため、モニタリング UI プラグインを再インストールする必要があります。(COO-978)

1.5. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.1.1

1.5.1. バグ修正

- 以前は、Cluster Observability Operator 1.0 からアップグレードした後、多くのクラスター上の **observability-operator** および **perses-operator** の Pod が、**OutOfMemory** エラーが原因で **CrashLoopBackOff** 状態になりました。このリリースでこの問題が解決されました。(COO-784)

1.6. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.1

Cluster Observability Operator 1.1 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHBA-2025:4360 Cluster Observability Operator 1.1](#)

1.6.1. 新機能および機能拡張

- COO を使用してモニタリング UI プラグインをインストールできるようになりました。(COO-262)
- モニタリング UI プラグインでインシデント検出を有効にできます。(COO-690)
- Thanos Web エンドポイントの TLS サポートが追加されました。(COO-222)

1.6.2. 既知の問題

Cluster Observability Operator 1.1.0 の既知の問題は次のとおりです。

- Cluster Observability Operator 1.0 からアップグレードした後、**observability-operator** および **perses-operator** Pod が **OutOfMemory** エラーにより **CrashLoopBackOff** 状態になります。回避策は、ナレッジベース記事 [ClusterObservability and perses operator pod in CrashLoopBackOff due to OOMKilled in RHOCP4](#) に記載されています。

この問題は [COO-784](#) で追跡されています。

1.6.3. バグ修正

- 以前は、ロギング UI プラグインがカスタムの LokiStack 名または namespace の設定をサポートしていました。このリリースでこの問題が解決されました。([COO-332](#))

1.7. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 1.0

1.7.1. 新機能および機能拡張

- COO を OpenShift Container Platform プラットフォームの監視に使用できるようになりました。([COO-476](#))
 - COO Web サーバーの HTTPS サポートを実装します。([COO-480](#))
 - COO Web サーバーの authn/authz を実装します。([COO-481](#))
 - COO からメトリクスを収集するように ServiceMonitor リソースを設定します。([COO-482](#))
 - OLM バンドルに **operatorframework.io/cluster-monitoring=true** アノテーションを追加します。([COO-483](#))
 - COO のアラートストラテジーを定義します。([COO-484](#))
 - アラート用の PrometheusRule を設定します。([COO-485](#))
- UIPlugin** CR に、サポートレベルのアノテーションが作成時に追加されるようになりました。サポートレベルはプラグインの種類に基づいています。値は **DevPreview**、**TechPreview**、または **GeneralAvailability** です。([COO-318](#))
- Prometheus CR で Alertmanager **scheme** および **tlsConfig** フィールドを設定できるようになりました。([COO-219](#))
- トラブルシューティングパネルの延長テクニカルレビューで、トレースを Kubernetes リソースと相關させ、ログ、アラート、メトリクス、ネットワークイベントなどの他の観測可能なシグナルと直接相關させるサポートが追加されました。([COO-450](#))
 - Web コンソールで **Observe** → **Tracing** をクリックしてトレースページに移動すると、Tempo インスタンスとテナントを選択できます。プレビュートラブルシューティングパネルは、**openshift-tracing** / **platform** インスタンスと **platform** テナントでのみ機能します。
 - トラブルシューティングパネルは、**Administrator** パースペクティブで最も効果的に機能します。Developer パースペクティブでは、一部のバックエンド、特にメトリクスとアラート用の Prometheus での認可の問題により、機能が制限されています。これは今後のリリースで対処される予定です。

次の表に、Cluster Observability Operator と OpenShift Container Platform のバージョンに応じて利用可能な機能に関する情報を示します。

COO のバージョン	OCP のバージョン	分散トレーシング	ロギング	トラブルシューティングパネル
1.0	4.12 - 4.15	✓	✓	✗
1.0	4.16 以降	✓	✓	✓

1.7.2. CVE

- [CVE-2023-26159](#)
- [CVE-2024-28849](#)
- [CVE-2024-45338](#)

1.7.3. バグ修正

- 以前は、COO インストールのデフォルトの namespace が **openshift-operators** でした。このリリースでは、デフォルトの namespace が **openshift-cluster-observability-operator** に変更されます。[\(COO-32\)](#)
- 以前は、**korrel8r** で解析できるものが時系列セレクター式だけでした。このリリースでは、**korrel8r** は有効な PromQL 式を解析して、相間に使用する時系列セレクターを抽出できるようになりました。[\(COO-558\)](#)
- 以前は、分散トレーシング UI プラグインから Tempo インスタンスを表示すると、トレースの期間を示す散布図グラフが正しくレンダリングされませんでした。バブルのサイズが大きすぎて、x 軸と y 軸に重なっていました。このリリースでは、グラフが正しくレンダリングされます。[\(COO-319\)](#)

1.8. 以前のテクノロジープレビュー リリースで利用可能な機能

次の表に、Cluster Observability Operator と OpenShift Container Platform の以前のバージョンに応じて利用可能な機能に関する情報を示します。

COO のバージョン	OCP のバージョン	ダッシュボード	分散トレーシング	ロギング	トラブルシューティングパネル
0.2.0	4.11	✓	✗	✗	✗
0.3.0 以降、 0.4.0 以降	4.11 - 4.15	✓	✓	✓	✗
0.3.0 以降、 0.4.0 以降	4.16 以降	✓	✓	✓	✓

1.9. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.4.1

Cluster Observability Operator 0.4.1 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHEA-2024:8040 Cluster Observability Operator 0.4.1](#)

1.9.1. 新機能および機能拡張

- Prometheus および Alertmanager の WebTLS を設定できるようになりました。

1.9.2. CVE

- [CVE-2024-6104](#)
- [CVE-2024-24786](#)

1.9.3. バグ修正

- 以前は、ダッシュボード UI プラグインを削除しても、**consoles.operator.openshift.io** リソースには **console-dashboards-plugin** が残っていました。このリリースでこの問題が解決されました。([COO-152](#))
- 以前は、Web コンソールに Red Hat COO の正しいアイコンが表示されませんでした。このリリースでこの問題が解決されました。([COO-353](#))
- 以前は、Web コンソールから COO をインストールすると、サポートセクションに無効なリンクが含まれていました。このリリースでこの問題が解決されました。([COO-354](#))
- 以前は、COO のクラスターサービスバージョン (CSV) は、非公式のドキュメントバージョンにリンクされていました。このリリースでこの問題が解決されました。([COO-356](#))

1.10. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.4.0

Cluster Observability Operator 0.4.0 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHEA-2024:6699 Cluster Observability Operator 0.4.0](#)

1.10.1. 新機能および機能拡張

1.10.1.1. トラブルシューティング UI プラグイン

- トラブルシューティング UI パネルが改善され、特定の開始シグナルを選択して絞り込むことができるようになりました。
- 深さを選択するオプションにより、Korrel8r クエリーの可視性が向上しました。
- OpenShift Container Platform バージョン 4.17 以降のユーザーは、アプリケーションランチャー  からトラブルシューティング UI パネルにアクセスできます。または、バージョン 4.16 以降では、Web コンソールで **Observe** → **Alerting** をクリックしてアクセスすることもできます。

詳細は、[トラブルシューティング UI プラグイン](#) を参照してください。

1.10.1.2. 分散トレーシング UI プラグイン

- 分散トレーシング UI プラグインが強化され、トレースの探索にガントチャートが利用できるようになりました。

詳細は、[分散トレーシング UI プラグイン](#) を参照してください。

1.10.2. バグ修正

- 以前は、通常のユーザーが Web コンソールの Developer パースペクティブで **Observe** → **Logs** をクリックしてアクセスした場合はメトリクスを利用できませんでした。このリリースでこの問題が解決されました。([COO-288](#))
- 以前は、トラブルシューティング UI プラグインによって、ネットワークオブザーバビリティーに対して誤ったフィルターが使用されていました。このリリースでこの問題が解決されました。([COO-299](#))
- 以前は、トラブルシューティング UI プラグインによって、Pod ラベル検索に対して誤った URL が生成されていました。このリリースでこの問題が解決されました。([COO-298](#))
- 以前は、分散トレーシング UI プラグインに認可の脆弱性がありました。このリリースでこの問題が解決されました。今後はマルチテナントの **TempoStack** および **TempoMonolithic** インスタンスのみを使用することで、分散トレーシング UI プラグインが強化されました。

1.11. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.3.2

Cluster Observability Operator 0.3.2 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHEA-2024:5985 Cluster Observability Operator 0.3.2](#)

1.11.1. 新機能および機能拡張

- このリリースでは、**MonitoringStack** コンポーネントで `toleration` とノードセレクターを使用できるようになりました。

1.11.2. バグ修正

- 以前は、ロギング **UIPlugin** を特定のバージョンの OpenShift Container Platform にインストールすると、ロギング UIPlugin が **Available** 状態にならず、ロギング Pod が作成されませんでした。このリリースでこの問題が解決されました。([COO-260](#))

1.12. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.3.0

Cluster Observability Operator 0.3.0 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHEA-2024:4399 Cluster Observability Operator 0.3.0](#)

1.12.1. 新機能および機能拡張

- このリリースでは、Cluster Observability Operator に、将来導入される OpenShift Container Platform オブザーバビリティー Web コンソール UI プラグインおよびオブザーバビリティーコンポーネントを支えるバックエンドサポートが追加されました。

1.13. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.2.0

Cluster Observability Operator 0.2.0 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHEA-2024:2662 Cluster Observability Operator 0.2.0](#)

1.13.1. 新機能および機能拡張

- このリリースでは、Cluster Observability Operator は、OpenShift Container Platform Web コンソールユーザーインターフェイス (UI) のオブザーバビリティー関連プラグインのインストールと管理をサポートしています。([COO-58](#))

1.14. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.1.3

Cluster Observability Operator 0.1.3 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHEA-2024:1744 Cluster Observability Operator 0.1.3](#)

1.14.1. バグ修正

- 以前は、http://<prometheus_url>:9090/graph で Prometheus Web ユーザーインターフェイス (UI) にアクセスしようとすると、**Error opening React index.html: open web/ui/static/react/index.html: no such file or directory** エラーメッセージが表示されました。このリリースでは問題が解決され、Prometheus Web UI が正しく表示されるようになりました。([COO-34](#))

1.15. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.1.2

Cluster Observability Operator 0.1.2 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [RHEA-2024:1534 Cluster Observability Operator 0.1.2](#)

1.15.1. CVE

- [CVE-2023-45142](#)

1.15.2. バグ修正

- 以前は、特定のクラスターサービスバージョン (CSV) アノテーションが COO のメタデータに含まれていませんでした。これらのアノテーションが欠落していたため、COO の一部の特長と機能がパッケージマニフェストまたは OperatorHub ユーザーインターフェイスに表示されませんでした。このリリースで、欠落していたアノテーションが追加され、この問題が解決されました。([COO-11](#))
- 以前は、COO の自動更新が機能せず、OperatorHub で新しいバージョンが利用可能であっても、Operator の新しいバージョンで古いバージョンが自動的に置き換えられませんでした。このリリースでこの問題が解決されました。([COO-12](#))
- 以前は、Thanos Querier が 127.0.0.1 ([localhost](#)) のポート 9090 でネットワークトラフィックのみをリッスンしていたため、Thanos Querier サービスにアクセスしようとすると **502 Bad Gateway** エラーが発生しました。このリリースで、Thanos Querier 設定が更新され、コンポー

ネットがデフォルトポート(10902)でリッスンするようになり、問題が解決されました。この変更の結果、必要に応じて、SSA(Server Side Apply)を使用してポートを変更し、プロキシチェーンを追加することもできるようになりました。(COO-14)

1.16. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.1.1

Cluster Observability Operator 0.1.1 では、次のアドバイザリーを利用できます。

- [2024:0550 Cluster Observability Operator 0.1.1](#)

1.16.1. 新機能および機能拡張

このリリースでは、Cluster Observability Operator が更新され、制限されたネットワークまたは非接続環境での Operator のインストールがサポートされるようになりました。

1.17. CLUSTER OBSERVABILITY OPERATOR 0.1

このリリースでは、Cluster Observability Operator のテクノロジープレビュー・バージョンが OperatorHub で利用できるようになります。